実践マップスキル研究会通信　Vol.7

平成24年12月18日発行　　発行：実践マップスキル研究会

先生が動き、子どもが動く　楽しい社会科の学習を！

東京学芸大学名誉教授　次山 信男

1　回を重ねるたびに引き出される課題

実践マップスキル研究会は、20回を重ねてきました。北海道から沖縄まで各地を会場に、多くの先生方と、教室の子どもたちを想定しながら、「地図や地球儀の何を、どのように」を、実技的に学び合ってきました。そして、そこでは、回を重ねるたびに、それまでにない「地図や地球儀の何を、どのように」が顔を出し、わたしたち講師メンバーも、常に新鮮な構えを求められてきました。きっと、これからも、回を重ねる中で、いろいろな実践的な課題を引き出していくのではないでしょうか。これこそが、地図、地球儀をめぐる“学びの広さ、深さ”だと思うのです。

2　机上の作業を、黒板の作業に！

さて、第19回の鳥取大会で、わたしが課題としたのは、白紙にフリーハンドで“県境”を描くことから始まり、そこに、地形や土地利用、交通路、おもな町などを描いていくというもので、机上でのごく当たり前の作業です。しかし、この作業の実際は、教室で、先生が黒板に「ここは、どうだろう？･･･これでいいかな？･･･」と、具体的に図を描きながら、子どもたちといっしょにすすめていく作業なのです。

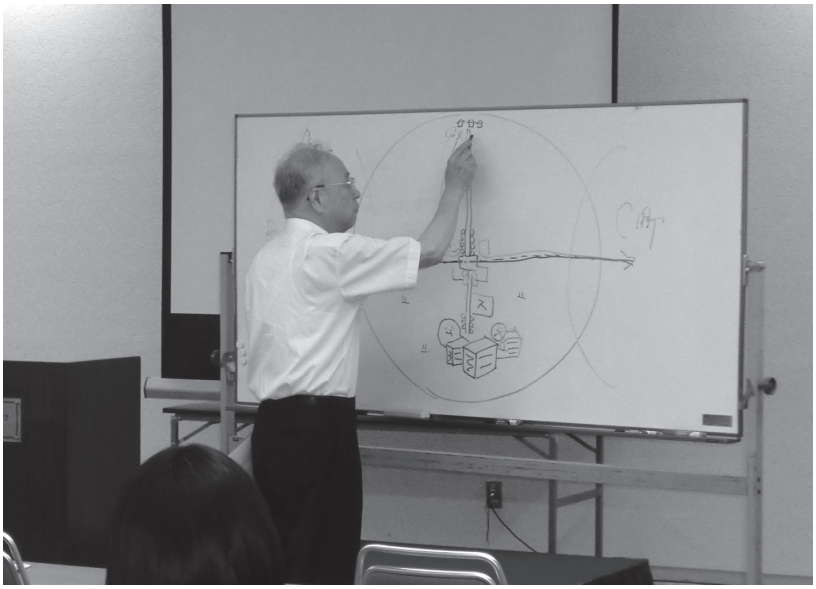
黒板ですから、もちろんフリーハンドです。先生の描く“県境”は、黒板いっぱいを使っての表現です。しかも、大胆に、すばやく。子どもたちに「アッ！」と言わせて欲しいのです。これができれば、あとは子どもたちの持っている情報をひろいながら、チョークの色を選びつつ描いていけば、黒板に子どもたちがイメージする“県の顔”が浮かび上がってくるのではないでしょうか。さらに、これに「題」をつけさせれば、あらためて自分たちの“県”を見直すチャンスにもなるでしょう。

マップスキル大会に参加された先生のコメントに、「県境に“ひげ”！」ということが出てきました。それは、県の輪郭だけではなく、“県境”に“ひげ”、つまり、自分の県境につながる隣接する県の県境“ひげ”をのばして、隣接する“県”を常に意識させてはどうかという、わたしの提案です。

第20回の北海道大会では、子どもたちの学習のベースである“札幌”から、教科書が題材としている“新潟の魚沼”への“旅”がテーマです。空路、鉄道、自動車、徒歩など、“旅”の手段とそのルートを考え、地図化、文章化をすすめるという課題です。

これも、先生が、黒板を舞台にして、「コースは、どこかな？」「乗り物は、何を？」「時間は、どのくらいかかる？」と、地図帳の地図と“にらめっこ”しながら、子どもたちといっしょにすすめていきます。そして、黒板の作業が途中まで来たところで、子どもたちを黒板から手放し、それぞれのコースを考えさせていくのです。子どもたちは、先生の作業を横目で見ながら、“地図とにらめっこ”し、自分のコースをいろいろと考えていくのではないでしょうか。そして、ここでも、この作業に「題」をつけさせてみたいですね。

鳥取大会も、北海道大会も、黒板での作業を想定したマップスキルの課題です。21回、22回は、どのような“マップスキル”に出会うでしょうか、楽しみです。先生が動き、子どもも動く“楽しい社会科”の学習を期待しています。



“黒板いっぱいに描こう！”と次山信男先生

第19回　教師のための実践マップスキル夏季１日講座 鳥取大会に参加して

鳥取市立美保小学校　下田 智美

地図には、さまざまな情報が載っている。県名、国名、土地利用の仕方、土地の高低･･･。挙げればきりがないほどだが、その場に行かなくても、地図を見る（読み取る）だけで、その情報から自分の思考をめぐらせ、いろいろなことを想像することができる。そんな理由で、私は小学生の頃から、地図を見たり地球儀を見たりすることが好きだった。学生の頃には、地図を片手に外国の街を歩き、さまざまな史跡や観光地を巡ったこともあった。日本中心の地図だけが世界地図だと信じていた頃に外国の地図を目にしたときの衝撃は、今でも鮮明に覚えている。「世界」というものや多面的に物事を見ることの大切さを教えてくれたのも、地図だった。そんな地図の魅力を、学習の中で十分子どもたちに伝えることができていない自分を省みて、もっと地図の楽しさを伝えたいという思いで、今回の実践講座に参加させていただいた。

当日は少人数のグループに分かれ、和気あいあいとした雰囲気の中で3つのアクティビティーが行われた。1つ目は、岩本先生の「学校のまわりで『身近な地域』の学習題材をさがしてみよう」で、先生が指導されている大学生の作成した地図をもとに、学習題材を選択する視点、調べ方、地図表現の方法などを学んでいった。さらに、会場である白兎会館周辺を歩き、実際に学習題材を探す体験をした。普段何気なく通っていた道だったが、「固定しているものか、変化するものか」とか「数えられるものか、数えられないものか」などの視点をもって歩いてみると、新たな発見がたくさんあった。子どもたちにも、こうして視点を与えることでさまざまな見方をさせたり町の工夫やよさを捉えさせたりできるのだろうと感じ、とても参考になった。

2つ目の次山先生の講座では、まず鳥取県の形（白地図）を何も見ずに描いた。その後、実際の地図と比較しながら修正し、地形や土地利用、特産物などについてまとめていった。予め自分で描いていたので、修正しながら県の形を明確に捉えることができた。また、白地図の「ひげ」、つまり県境を描いて隣接する県を意識させることが大切だと教わり、目から鱗の思いだった。

3つ目の寺本先生の講座では、いろいろな地図指導の仕方をお話いただき、地図で身につけたい力を捉えることができた。さらに「アメリカ大陸横断地形指導術」のアクティビティーでは、アメリカ大陸の西海岸側から東海岸にかけての地形をダンボールの模型を作成することで実感させる学習法を学んでいった。実際に約３cm四方の四角いダンボールを糊で貼って模型を完成させていくことで、国土を実感的に理解することができ、子どもたちにも有効な指導術だと感じた。

子どもたちに地図の楽しさを伝えたいという思いで参加した今講座だったが、私自身がとても楽しみ、いろいろなことに気づかされた1日であった。今回学んだことを子どもたちに還元できるよう、授業の中での地図活用の仕方をさらに研究していきたいと思う。

岩本廣美先生

第19回　教師のための実践マップスキル 夏季１日講座 鳥取大会に参加して

鳥取市立浜村小学校　渡辺　容

小学校で使われている地図帳は、県の場所や位置、その土地の使われ方や標高などがわかることはもちろんのこと、縮尺などで距離を調べたり、地方ごとの特産物などを知れたりと見ているだけでいろいろな情報が知れ、とても興味深く読むことができる。子どもたちにも、今より少しでも地図に興味をもってもらえるには、どのような指導を行ったらよいのかを学ぶために、同じ小学校の先生と誘い合って、この講座に参加しました。

午前中は少人数のグループに分かれての３つのアクティビティを行った。最初は岩本先生の「学校のまわりで『身近な地域』の学習題材をさがしてみよう」でした。はじめに、大学生がテーマを決めて描いた地図を見せていただいた。お店の種類、落ちている煙草の吸殻の数など様々な視点のものがあった。まとめたものから、なぜそのような特徴があるのかを考えることで、その地域の取り組みや歴史などが見えてくると教えていただいた。その後、研修会場の外に出て学習題材になりそうなものを探して、歩いた。電柱の種類や駐車場、家の形なども学習題材になると言われ、何か視点を決めて見ていくとどんなものでも学習に活かせそうだと感じた。

２つ目の、次山先生の「都道府県の学習と地図帳との出会い」は、Ａ４の紙に自分の住んでいる県の形、さらに隣接している県、自分の県の主要な道路、特産物などを書き、最後に自分の書いた地図に題をつけるという活動だった。隣接している県はすぐに分かったのだが、地図に書き込んでいくとなるとどの部分で接しているのかがとても難しく感じた。子どもたちに教えるときにも、このように地図を書く活動を取り入れるとさらに周りの県の位置について深く理解できると感じた。県の主要な道路・川、特産物などを書き込み、県に題名をつけることは、鳥取県のＰＲを考えているようで、とても楽しく活動することができた。

最後の寺本先生のアクティビティでは、まず短冊地図について教えていただいた。学校を中心に置き、自分の家までの道を短冊に書き、置いていくという学習だった。生活科の中で行う活動で、学校の周りに興味を持たせることや方角についての初歩的な学習になると教えていただいた。学校から考えていくということで、みんなのスタート地点が一緒で、低学年の児童にとってはとても分かりやすいと感じ、実践してみたいと思った。次に行った段ボールを使った地形づくりは、標高や距離などを考えて、小さく切った段ボールを並べたり重ねたりして作る活動でした。基本の形を全員で作り、学習を進めていく中で、どんどん書き込んでいき、一人一人のオリジナルのものになっていくというところが、子どもたちにとってみるととても魅力的な教材になると感じた。

午後の講演では、社会科における言語活動の充実についてと地図学習を行って育てたい力について話がありました。社会科学習で多く使われる、地図、写真、グラフなどは非連続テキストといわれるもので、これらを読み解くためには、それぞれを関係付けて自分で解釈する力が必要になってくるそうである。講演の中で、地図学習を効果的に行えば、そのような力がついてくるといわれた。午前中に行ったアクティビティを振り返ってみると、一つ一つは違うことをしているのだが、つなげていくことで考えが深まったり、広がったりする活動だった。今日、この場で学んだことを自分だけのものとせず、同じ学校の先生に広めたり、子どもたちと一緒に学習したりしていきたい。

寺本 潔先生

第20回　教師のための実践マップスキル夏季１日講座 北海道大会に参加して

札幌市立信濃小学校　青柳 吉乗

「わかりやすい講座で楽しかった」「どのようにして地図帳を使ったらいいのか勉強になりました。目からウロコでした」「ゲームやクイズなど、さっそく自分の学級でもやってみたい」「４学年のアイヌの人々の生活では地図を効果的に活用させてみたい」「長篠の戦いの学習で地図帳の活用法に驚きました。生麦事件やノルマントン号事件のときには今回学んだことを実践したいです」「２学年のときから空間認識を身に付けさせていくことの大切さがわかりました」など、参会後も職場では『第20回実践マップスキル夏季１日講座北海道大会』の話題になりました。

本校の尾田正則校長（札幌市教育地図研究会会長）から、今回の実践マップスキル講座が札幌で開催されることを聞き、本校の先生方を誘って総勢10名で参加させていただきました。新卒を含む若手の先生、ベテランの先生、専門教科が社会科ではない先生、地図指導が苦手な先生、特別支援学級の先生など十人十色でしたが、講座に参加して、みな一様に充実感（＝地図指導の楽しさ）を満喫しました。

＜地図を活用した具体的実践例の数々＞＜体感や実感を通して身に付けさせていく指導術＞＜切り貼り作業の伴う演習＞＜近くの名所まで出かけるフィールドワーク＞など、魅力的な内容はもちろんのこと、同僚の多くが、＜少人数のグループに分かれたアクティビティ＞＜ローテーションで進める３つのアクティビティ＞などの「当日のスケジュール」にも驚き、講座の進め方に新鮮さや斬新さを感じました。私たちにとっては、内容と方法（手法）の両面が、まさに衝撃的でした。

次山先生の「札幌から新潟魚沼への旅の様子を文章化しよう」では、地図帳を基にした（言語活動を重視した）表現力の育成について学びました。文章化という作業を通して、個々に違いが生まれ、必然的に情報交換や交流へと活動を展開していく実践例でした。表現力の育成が、自己選択や自己決定という能力にも繋がり、さらに自信へと高められていくことが理解できました。

寺本先生のアクティビティでは、数多くの具体的な実践を教えていただきました。「方位・方角を体に刷り込ませていく方法」「方位距離シートの活用」「南西諸島の宝島」など、どれも刺激的・魅力的でした。修了書授与の後に意見交換会がありましたが、僭越ながら「竹島・尖閣諸島・北方領土など国境の問題には複雑な事情が絡んでいるが、６学年の指導で留意すべき点は何か」という私の質問に対しても的確で分かりやすいご助言をいただきました。本当にありがとうございました。

道産子である大西先生の「地球儀を作って使ってみよう」では、地図上でしか認識していない世界と地球儀で見る世界との違い（＝自分の思い込み）に改めて驚かされました。「グリーンランドが、日本から見た方位の北に位置する」など再発見でした。また、会場近隣でのフィールドワークでは、今まで知らなかった札幌の歴史についても教えていただき、「立地条件（位置関係）の意味や理由を歴史的な目からも考えること」を学びました。

今回参加させていただき大変勉強になりました。今後の地図指導については、校内の授業づくりや教材作成に活かしたり、民間の教育団体である地図教育研究会での諸活動（授業研究、社会科作品展やフィールドワークの開催）を充実させたりしながら、地図帳や地球儀の有効な活用についてより一層追究していきたいと思います。

鳥取大会も北海道大会も多くの先生方にご参加いただきました。ありがとうございます。記録的な猛暑だった今夏、日中・日韓の領土問題も熱かった時期でもありました。これからはTPPやEU危機など、国際的にも国内的にも地理・地図を駆使した教育の重要性が高まっていくのではないでしょうか。

〒101-0051
東京都千代田区神田神保町2丁目5番地　神保町センタービル5階
一般財団法人　地図情報センター内　**実践マップスキル研究会事務局**
Tel 03-3262-0846　Fax 03-3234-0872　Eメール：mapskil@yahoo.co.jp